

明治31年（1898）田辺政之助の三男として京都市に生まれ、大正11年東京帝国大学工学部建築学科卒業。同年神戸高等工業学校講師、9月より建築構造学研究のため独・英・米に2ヶ年間留学。主として独逸のドレスデン工科大学でゲーラー先生の指導を受けた。大正14年1月帰国、2月神戸高等工業学校教授。昭和4年3月「鉄筋コンクリート版の基本的事項に関する研究」で東京大学より工学博士を授与された。同年4月東京工業大学教授兼神戸高等工業学校教授、昭和16年日本建築学会より「耐震壁に関する実験的研究」で学術賞を受けた。この間は耐震構造の研究が主で、特に木造建築の耐震性の向上に多くの提言をしている。著書としては、昭和8年に「耐震建築問答」、9年に「鉄筋コンクリート構造」（共著）がある。戦時下に入ると、防空についての研究や講演が多くなり、昭和17年『『ドイツ』一防空・科学国民生活』の著書がある。昭和18年に『空と国』一防空見学・欧米紀行」、昭和20年に「不燃都市」と防災面から都市への関心を高めてきた。戦後の昭和21年（1946）「明日の都市」を刊行するとともに、昭和22年10月より、日本損害保険協会の「都市巡回防火講演会」の講師となり、全国80数都市に足跡を印した。その成果が昭和27年の「都

市防火」（東日本・西日本篇）でまとめられている。また警鐘的な隨筆が数多くあり、昭和29年（1954）2月に56才で逝去された後に「火風地震」「家・地震・耐風」の2著書にまとめられている。

田辺先生は短い人生を全力で走り抜けていた感があり、常に努力々々の積み重ねであつて、座右の銘としては「意志ある所必ず道あり」を掲げておられた。また大変几帳面で、整理が上手で、どの資料が何処にあるか常に明らかにしておられた。また話上手であることは誰もが認めるところであるが、その後には、原稿を何度も読み返し、また奥様に話して聞かせ、訂正を行った後に、本番に臨まるという用意周到さがあった。

都市計画については、戦時中の防空の研究から発展され、都市防災面について、特に都市不燃化に熱心に取り組まれた。特に「大火危険度」という包括的な都市の大に対する等級を設け、その弱点を指摘して、戦後の混乱期における都市防災の重要性を訴えられた。

